

受け継ぐ技と想い



「父から息子たちへ伝えたい技と想い」

11年前に「原一林業株式会社」を設立した原口良一さん。代々林業を生業として生きてきたそので、良一さんと4代目。その父のもとで林業を学んでいるのが優一さん(25)と広一さん(20)の二人です。長男の優一さんは、鹿屋農業高校の緑地工学課を卒業してすぐに林業の世界へ。「プロセッサやグラップルなどの高性能林業機械は全部扱えるようになりまして。あと持っているのが架線集材の資格です。祖父と父が持っているの、いつかは自分も」。

架線集材とは、ワイヤロープを空中に張って組み上げた集材装置を使って、伐採した木材を土場と呼ばれる集積場まで吊るして運ぶ方法のことです。おもに重機の入らない

急傾斜地などで行われますが、国家資格(架線技師免許)が必要で、年々熟練の架線技師は減っているそうです。「架線集材は、伐った木を土に着けず美しく出せませし、重機が入らないため、あとの植林を考えても、山を荒らさないのが自然にやさしい。この現場を見てください、とても綺麗でしょ？山は人間だけのものではなく、そこで生きる動植物もいる。ともに共存しながら守るためにも、父から技術を引き継ぎたい」と思いを込めます。

木材の輸出、集成材技術の進歩、高性能林業機械の普及など、日本の山が新たな時代へ移り変わろうとしています。価格低迷により手つかずだった山が動き出しました。しかし、決して忘れてはならないことは次の世代へ引き継ぐこと。これは山主だけの問題ではありません。山は水を貯え、酸素を作り出す、私たちに与えては欠かせない存在。大切なことは関心を持つこと。それぞれができることに目を向ける時がきています。

原口良一さん(写真右) 原口優一さん(写真左) 原口広一さん(写真上)

次世代へ



「晩の『だれやめがなんつあならんど』」

「山で食べる弁当は最高や〜」

野嶽真澄さん(71)

正人さん(68)

「まあ座いやい(座りなさい)」と丸太のイスとテーブルを用意してくれたのは、今年68歳になる野嶽真澄さんと、71歳になる野嶽真澄さん。長年勤めた森林組合を退職しましたが、人手不足で声がかかり再就職したそうです。

「家にもつてるより、山に来てうまい空気を吸ってるほうがいい。毎日山を歩いているから若いもんより元気や〜」と話す梅さん。森林組合は、主に間伐現場が多く、機械化が進んだとはいえチェーンソーの出番も多いそうです。

「まずは受け側を切って反対から追い口を切る。『つい』

を2〜3センチ残して矢(くさび)をハンマーで打ち込む。こうすると倒したい方向に木を倒すことができる」と切り株を使って説明する野嶽さんですが、「まあたまに失敗して他の木にかかることもある。こうなると倒すのに難儀をする」と苦笑い。

「林業はきついが、やりがいのある仕事。間伐した山を見ると、いい山に育ったなといつも思う。結局は山が好きだからやめられない」と二人は続けます。森林組合の作業員の平均年齢は58歳と高齢化が進んでいます。「機械化が進んでほとんどの作業は重機で

きるようになった。ただ、山仕事で一番大変なことは、植栽してから5年間の草刈り。草刈りは夏場で日陰もないうえに、ハチやマムシも。若い人にはきつい仕事かもしれない。早くラジコンの草刈り機が開発されないかと待っているとこだ」と笑います。

長年、山の仕事を続けられる秘訣を聞いてみると「毎朝笑顔であいさつ」と返ってきました。各班4人で作業しますが、一番は大切なことはお互いの信頼関係と話します。「いい仲間にも恵まれてる。これからも山で働きたい」と今の思いを語ってくれました。



1仕事はきついが山で食べる弁当は最高にうまいと話す二人 2毎朝の体操と朝礼。笑顔でのあいさつは欠かさない日課 34常に危険と隣り合わせの林業。培った経験や技術を引き継ぎたいと話す

